聖書日課『からし種』2023.10.1－10.8

10月1日 （日） エステル 8章	**「王の名によって書き記され、王の指輪で印を押された文書は、取り消すことができない」（8節）。**「自分の国がどれほど富み栄え、その威力がどれほど貴く輝かしいものであるか（1：4）」を誇ったクセルクセス王だが、自分が軽率に発令した法を自分で取り消す力がなかった。人である自分の限界をわきまえないわたしたちの過ちの歴史はこうして続いてきたのか。
2日 （月） エステル 9章	**「このプリムの祭りは、ユダヤ人の中から失せてはならないものであり、その記念は子孫も決して絶やしてはならないものである」（28節）。**「悩みが喜びに、嘆きが祭りに変わった（22節）」とあるが、力に頼っての「安らぎ」は長く続かない。ただ、多数派の敵意に晒されつつ生きた「散らされたユダヤ人」に、この祭りを忘れたくない切実な想いはあったのだろう。
3日 （火） エステル 10章	**「彼（モルデカイ）はその民の幸福を追い求め、そのすべての子孫に平和を約束した」（3節）。**「取り引きされ、滅ぼされ、殺され、絶滅させられそうになって（7：4）」いたユダヤ人にとって、エステル記の成功物語は神による幸福と平和の約束と思えたのだろう。しかし真の幸福と平和の約束とは、彼らの只中にイエス・キリストが送られることだったのではないか。
4日 （水） ヨブ記 1章	**「ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。『わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ』」（20―21節）。**この賛美を口にするまで、ヨブの心にどれほどの怒り悲しみが吹き荒れたことか。今日から、神の御前で壮絶な心の戦いを展開していくヨブと友人たちに伴走したい。

メール配信登録メール　senfkorn.obc@gmail.com　　大井バプテスト教会

メール配信希望の方は名前とアドレスを明記の上、上記のアドレスまで

聖書日課『からし種』2023.10.1－10.8

5日 （木） ヨブ記 2章	**「三人は、ヨブにふりかかった災難の一部始終を聞くと、見舞い慰めようと相談して、それぞれの国からやって来た」（11節）。**三人の友人は、ヨブを慰めようと遠くからやってきて、ヨブとともに嘆き、黙ってそばに座る日々もあったことを覚えておきたい。それでも、自らが抱いている「信仰」という考えではヨブを慰め励ますことができず、苛立ちを募らせて行く。
6日 （金） ヨブ記 3章	**「なぜ、労苦する者に光を賜り／悩み嘆く者を生かしておかれるのか」（20節）。**その人の労苦や悩み嘆きは、他の人がわかろうとしても決してわからない。ただ、全ての苦しみ痛みを経験してくださったイエス・キリストだけは知っておられると信じて、「労苦する人、悩み嘆く人にそれでも生きる意味を見出させてくださるように」と祈り続けることはできるだろう。
7日 （土） ヨブ記 4章	**「あなたは多くの人を諭し／力を失った手を強めてきた。あなたの言葉は倒れる人を起こし／くずおれる膝に力を与えたものだった」（3−4節）。**友人エリファズがこれまでのヨブの働きを明かす。多くの人を神に導く人、励ます言葉を語る人も、災いがふりかかれば弱りおびえてしまうのは人として自然なことだし、神がその働きをお忘れになることはないと信じる。
8日 （日） ヨブ記 5章	**「神は貧しい人を剣の刃から／権力者の手から救い出してくださる。だからこそ、弱い人にも希望がある」（15、16節）。**エリファズは正しい。神の正しい裁きは、貧しい人、弱い人の救いであり希望である。ただ「そうではない現実」が広がる世界のどこに神はおられるのか、というヨブの問いに対する答えとして、主イエスが十字架の死を死なれたことを覚えたい。

大井バプテスト教会